

ヴェクサシオン

新井 満



文藝春秋

ヴェクサシオン

新井 満

文藝春秋

ヴェクサシオン

一九八七年九月二十五日 第一刷

一九八八年一月二十日 第二刷

定価 一二〇〇円

著者 新井 満

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表〇三二六五―一二二一

印刷 大日本印刷

製本 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

© Arai Man 1987

Printed in Japan

ISBN4-16-309970-0

目次

苺，

ヴェクサシオン

67

「あとがき」にかえて

失われたデュフィと七つの断章

装画

ラウル・デュフィ

「開かれた窓の静物」

Raoul Dufy

"Still life before an open window"

© by SPADEM Paris, 1987

ブリヂストン美術館（石橋財団蔵）

作品集

ヴェクサシオン

莓

1

「あらゆる思想は、

損われた感情から生まれる」

そう言ったのは、哲学者のシオランであった。この言葉に普遍妥当性があるかどうかはよくわからない。だが、少なくとも「俺の場合には、びったしだな」と雨宮三郎は考えている。へもつとも、この俺に思想があればの話だが……

それはともかく、三郎の思想らしきものを生んだのは、三郎の損われた感情であった。三郎の損われた感情を生んだのは、三郎が受けた苦痛であった。

苦痛。早い話が、はらいた、である。

救急車で運ばれている間中、ずっと、

「殺せ、早く殺してくれ！」と三郎は叫びつづけていたらしい。担架の上で胎児のように丸くなったり海老ぞりにのけぞったり、かと思えば壊れた玩具の猿よろしく狂ったように手足をバタつかせたり、一刻もじっとしていなかったというのである。三郎はその時、十九歳の誕生日を迎えたばかりで、大学に入学してから一カ月が過ぎたところだった。

キャンパスの一角に四階建ての男子学生寮があり、二百人ばかりの地方出身者が一室に二人ずつのペアを組んで暮らしていた。四階が新入りの一年生、三階が二年生、二階が三年生という具合に寮生たちの部屋は学年が上がるたびに、より低い階へおりてくる。その方が階段を上り下りするのに楽だからである。三郎は四階の一室に居て深夜、発病したのだった。

「押さえつけるのが一苦労でね」

一年前の大事件を思い出すたびにKは、苦笑しながら言ったものだ。Kは九州宮崎の出身で、三郎と同室だった。この男が、ベッドで悶え苦しんでいる三郎の異状に気付き、下着一枚の格好で裸足のまま舎監室まで走ったのだ。

「あの時の君の馬鹿力といったらなかったよ。今じゃ信じられんがね」

「ごめん。でも、うまく思い出せないんだ」

それは、三郎の正直な気持ちだった。無数の鉄の針で腹の中をかきまわされているようなあの夜の激痛は、いくら忘れようとしても忘れることができない。しかし、それ以外の記憶は、すべてが茫漠としてとらえどころがなく、ひどく性の悪い夢を見て目覚めた朝ほどの実感もない。

「私も実は……」とT神父が口を開く。「相当やられました」

T神父は、イエズス会の神父でスペイン語と宗教学を教えている。当夜、舎監室で寝ていたところをKに叩き起こされ、ベッドで七転八倒している三郎の様子を見て仰天し、一九番に電話したのだ。

T神父とKとは救急車に同乗して病院まで付き添ったのだが、苦しんで叫びながら暴れまわる三郎の身体を押さえつけるのに往生したらしい。Kは顎に数発のアップercutを喰らい、T神父は胸をイヤというほど蹴飛ばされた。救急車で入院すべきは、むしろ自分たちの方だったと言いたげなのである。

二軒の大きな救急病院は、ベッドが満杯であるという理由で三郎の収容を断わった。三軒目の比較的小さな救急病院が、ようやく引き取ることを承知した。三郎がかつぎ込まれ

た時は既に夜明け前で、その病院には一人の当直医と三人の看護婦がいた。

看護婦たちはカップブラーメンを食べている最中だった。縁なしの眼鏡をかけた、まだ若い当直医は、たった今夢から醒めたんだけど、という顔で両眼をしばたたかせながら、

「どうされました？」と三郎に言った。

「おなかが痛むんです」

「どれくらい？」

「千匹の針ネズミが……」と三郎が答えた。「おなかの中で運動会を開いて走り回っているような、それくらい」

「なるほど」と当直医が言った。「こんなことは、以前に何度も？」

「いえ、初めてです」

「そうか、困ったもんだねえ」

そう言うとき当直医は、三郎の腹部を押したり、さすったりした。冷たい手だった。

「しばらく様子を見ることにしましょう。これで多分、痛みも消える筈ですから」

当直医が「ブスコパンを」と言うとき、太った看護婦が「ハイ」と答え、次に三郎のズボンをおろして尻を露出させ注射を打った。

痛みは消えなかった。消えるどころか、ますますひどくなる一方だった。ベスビオ火山

の大噴火を馬穴の水一杯で消そうとするようなものだった。三郎は、ほとんどボンベいの遺跡同然の状態となり、虫の息になった。六時間後、「どうやらこれはただごとではないらしい」と判断した別の医師たちによって慌てて開腹手術を受けたのだが、既に三郎の胃壁は破れた後で、腹腔内は血の海であった。

かろうじて一命は取り止めたものの、術後の経過が思わしくなかった。郷里へ帰ってからも三郎の腹痛はおさまらず、それどころか今度は腸閉塞を起こしかけたりした。夏が終わり、二学期が始まったが、腹痛はいぜんとして直らない。三郎は、大学へ休学届を送った。

秋になった。

「どうも手術の方法に、問題があったかもしれないねえ……」と郷里の大学病院の内科医は首を傾げながら言った。「ためにしに薬を変えてみましょうか。新薬ですがね」

三郎は、その晩、再び救急車で運ばれる羽目になった。薬を飲んだとたん、卒倒したのである。床に卒倒すると、キツネのように両眼をつり上げ、犬のように舌を出し、感電したように全身を痙攣させ、アワを吹いた。舌を噛み切りそうになったので、口の中にスリッパを突っ込まれたりした。

意識が戻ったのは、二日後の夕方である。

三郎は大学病院のベッドに寝かされていたが、ベッドの構造がいつもと違っている。鉄柵がベッドのまわりを囲っているのだ。それは寝相の悪い患者の墜落を防護する為というよりは、何か狂暴な獣の逃亡をあらかじめ阻止しようとする為のものであるような気がした。つまり一種の檻だ。

病室の扉が開いて、医師が入って来た。初めて見る顔だった。必要以上に笑顔を作ろうとしているようで、はなはだ気味が悪い。

「こんにちは」と医師が言ったので、「こんにちは」と三郎も答えた。

「具合は、どうかな？」

「ええ、まあまあです」

「この指が見えますね？」医師が突然、右手を上げると言った。「数えてみてください」

「五本」と三郎は答えた。

「今度は？」と言って医師が左手を上げた。親指だけが折り曲げられていて、三郎の方からは見えない。

「四本」

「両方を合わせると？」

「…………」三郎が言った。「九本」

「よろしい」医師が笑った。「それでは君の名前と年齢と住所をゆっくり言ってみてください」

三郎が馬鹿馬鹿しくなって黙ったまま知らん顔をしていると「忘れたのですか？」と医師がまた言った。仕方なく三郎は自分の名前と年齢と住所を教えた。医師はカルテを確認しながらいちいち肯き、最後にもう一度三郎に笑いかけると、満足げに引きあげて行った。どうやらテストに合格したのである。

その日から丸二週間、三郎は脳に関するあらゆる精密検査を受けさせられた。三郎は、内科でも普通の外科でもなく脳神経外科病棟に収容されていたのである。

退院する日の朝、内科医が三郎の母の傍に来て何事かを囁いた。

「薬がちょっと強過ぎたようだね」

早い話が、投薬ミスだったというのだ。ボヤを消すのにアスワンハイダムにたまった水をいっぺんにぶっかけてしまった。まア、そんなところだったらしい。

「でもねえ、君、腹はともかく……」と内科医が言った。「脳の方は自信を持ってもらいたいぜ」

三郎も母も、うんざりした気分になって大学病院を後にした。

不思議なことに、腹痛は二度と襲って来なかった。投薬ミスで脳もびっくりしたが、腹痛の方も相当ショックだったらしいのである。

腹痛は、去った。

去られてみるとおかしなもので妙に懐かしかった。憎んでいた喧嘩相手が急に転校したような気分だった。戦うべき相手を失ったボクサーは、急に老け込むという。

「顔が変わったね」と母が言った。

「どうなふうに？」と三郎。

「なんだか、よその子供のようだ」

「違うよ」と三郎より四つ年上の兄が口をはさんだ。「死ぬ前のYさんにそっくりだ」

Yさんというのは隣家の老人のことで、昨年、八十九歳で死んだのである。老衰だった。

兄の観察は正しかった。発病前に八十キログラムあった三郎の体重は四十キログラムに半減していたし、病み疲れた顔を鏡に映してみると、なるほど老人のようである。

「疲れた……」

それが三郎の口癖になった。たったの十九歳で、既に十分な歳月を生きてきたような気